

移動の運動の表現

——格助詞「に」「を」の表現機能を中心に——

小 松 光 三

一 移動と場

「移動の運動」は、ある事物が、ある点から他の点に位置を変えていく運動である。どの運動でも、必ずその運動が生起し展開する「場」を持っているが、移動の運動は、位置の運動であるところから、とくに場というものが強く意識され、大きな意味を持っている。事実、現代日本語においても、「松山に」「松山へ」「松山を」「松山から」などというように、移動の運動を表す動詞に場を示す格助詞にもさまざまなものがあり、複雑な表現を実現している。そこで、移動の運動を表す動詞と場の表現がどのような関係で結び付いているかを考えてみたいと思う。

もつとも、どの動詞を移動の運動を表す動詞と認めるかは容易なことではない。国立国語研究所「分類語彙表」には、「2.1521 移動・発着」の項が設けられているが、それ以外でも「2.1523 走り・飛び・流れなど」「2.1524 通過」「2.1525 追ひ・逃げなど」「2.1526 進場」

「2.1527 往復」「2.1530 出入り」「2.1540 上がり下がり」「2.1561 距離」などに属する動詞も移動の運動を表す。さらに、「2.3392 足の動作」に属する「歩く」「駆ける」「走る」などの動詞もまた移動の運動を表す動詞に含まれよう。「2.1510 動き」の「動く」も移動の運動を表すのに使われることがある。このように、移動の運動を表す動詞といっても簡単に限定できるものではない。要するに位置の変化にかかわる運動であるということに基づいて、丹念に、具体的に考察し、分析していくしかない。

移動の運動が行われる場には、大きく分けると、空間を場とする「空間場」、時間を場とする「時間場」とがある。それぞれの場における、移動の運動と場の関係を中心に、考察を進めることにする。

二 移動と空間場

まず、空間場から考察することにしてしよう。いま、Aという空間の

場があり、その中において、p地点からq地点へ、Hなる事物（移動主体）が移動するでしょう。このような空間移動は次のように表現される。

HはAをpからqまで移動する。

具体例を挙げると

台風は、日本列島を南から北へ進んでいった。

となる。この文では、Aという空間場は日本列島、p点は南、q点は北、そして、Hなる移動主体は台風ということになる。そして、移動の運動は「進んでいく」という動詞の連文節が表す運動である。すなわち、この文は、台風が、日本列島という空間場の中を、南という地点から北という地点へ移動していったことを表している。ここで注意しなければならないことは、移動が行われる空間場を示す格助詞が「を」であって、「に」ではないということである。

HはAにpからqまで移動する。

という形にはならないのである。

台風は、日本列島に南から北へ進んでいった。

は成り立たない。

格助詞「に」は、一般に場所を表す意味・用法を持つとされているが、単純に場所すなわち空間場を表すものでないことが、このことから分かる。では、格助詞「に」はどのような空間場を示す意味・用法を持つのであろうか。

本はここにある。

これは、明らかに成立する文である。

私は自宅にいる。

白熊は北極に住む。

これらもまた成立する文である。

これら成立する文に使われている三つの動詞「ある」「いる」「住む」はいずれもある事物の存在を表しているが、移動を表していない。「ある」「いる」「住む」は、静止した状態を表す動詞である。静止した状態を表す動詞の空間場を示すのには格助詞「に」が使われるのではないかと推定される。^{注一}格助詞「に」が示す空間は、その中では移動が出来ず、事物が静止している状態にある場であることが分かる。このような空間によってつくられている場を、「静止空間場」と呼ぶことにする。また、先の格助詞「を」で示される空間は、その中を移動主体が移動できるので、そのような空間によってつくられている場を「移動空間場」と呼ぶことにする。

さて、格助詞「に」には、次のような空間場の指示用法がある。

ウグイスが梅の木に止まる。

電車が三原駅に到着する。

福島を経て仙台に到る。

小包が、我が家に届く。

被害が全国に及ぶ。

「止まる」は、移動の運動が、ある空間場で静止の状態に移行する運動を表す動詞である。しかし、「到る」「届く」「及ぶ」は、必ずしも、静止の状態に移行するわけではない。

淀川は京都府に到り、さらに大阪府に流れ込む。

フタは一階の軒まで届き、二階へのびていく。

この流行は全国に及び、海外にまで広がる勢いをみせている。

といった場合は、移動の運動が停止するわけではない。現実には、

移動の運動は、同じ状態で継続しているのである。

「到着する」は、「止まる」に近い。たとえば、

東京行きの電車が浜松に到着した。

という場合には、さらに移動を継続するわけだが、先の「到る」

「届く」「及ぶ」の例の場合とは違って、やはり、一旦静止の状態に

移行する。

しかし、現実には、静止の状態に移行しない場合があるにしても、

「止まる」「到着する」「到る」「届く」「及ぶ」が、「進む」「行く」

「走る」などとは違って、静止の状態への移行の映像を持っている

ことは否定できない。もちろん、これらの動詞が表す運動は、移動

の運動も内包しているから、「ある」「いる」「住む」などといった静

止の状態を表す動詞とも異なるのである。

「止まる」「到着する」「到る」「届く」「及ぶ」などが表す運動（到着

の運動）と呼ぶのは、移動、静止のいずれを失っても成り立たない

運動である。到着の運動が消滅する瞬間まで二つの要素は失われな

い。移動を失ったときは、静止であって、到着ではない。静止がな

ければ、到着にはならない。

しかし、運動の客観的性格はそうであっても、我々は、そうは認識しない。移動の運動の後に静止がくる、それが、到着の運動だと

認識する。静止こそが、到着の運動の実現だととらえている。した

がって、到着の運動が実現する空間場は、静止空間場ということに

なるのである。格助詞「に」がそれを示す。このように、格助詞

「に」が、単に運動が行われる空間場を示すだけではなく、その空

間場を、運動が静止する場であると規定する機能を持っているとい

うことは、文法論上からも非常に重要である。格助詞の機能が、他

の文構成要素との関係概念を規定するだけではなく、上接語の表す

概念まで規定する働きを持つことを意味するからである。

では、「ある」「いる」「住む」のように静止の状態を表す動詞で

もなく、「止まる」「到着する」「到る」「届く」「及ぶ」のように移

動の後に静止することを表す動詞でもない、ただひたすら移動を継

続するだけの動詞には格助詞「に」は使えないのだろうか。

重信川が愛媛県を流れる。

格助詞「を」によって空間場を示すなら、ただひたすら移動を継続

するだけの「流れる」を使った文も成立する。しかし、

重信川が愛媛県に流れる。

という文は成立しないのである。

もっとも、

淀川は大阪平野に流れる。

というように格助詞「に」を使った文も成立する。ただし、この場

合は、格助詞「に」が示す空間場は、「流れる」という移動の運動

の停止する場——到着点であって、「流れる」という移動の運動が

展開する空間場ではない。

やや古典的ない方になるが、

大空に雲が流れる。

といういい方は成立する。格助詞「に」で示されているのであるから、「大空」は、静止空間場としなければならない。この場合、大空は、「流れる」という移動の運動の直接の空間場となっているのではなく、「流れる」という移動の運動が存在する空間場として示されているのである。大空に、「雲が流れる」という現象が今存在しているというのが、「大空に雲が流れる」という表現だと考えれば、格助詞「に」が静止空間場として示している理由を理解することが出来る。普通、存在を表す動詞「いる」がついて「流れている」という形をとる。このような表現は、後の節で詳しく説明する時間場の場合には、普通の表現として行われている。

また、結果的には移動の運動を表しながら、空間場が静止空間場として示される、次のような、運動の存在の場を示す表現がある。

欧州に旅する。

しかし、「旅する」は、あくまで、サ変動詞であって、サ変動詞「する」には移動の運動を表すという限定された意味はない。無限定であるから、逆に、移動の運動として、

欧州を旅する。

といういい方も可能なわけである。「欧州に旅する。」も古典的ない方である。

道を歩く。

とはいいが、

道に歩く。

とはいえない。

犬ぞりが広大な南極大陸を進む。

は、成立するが、

犬ぞりが広大な南極大陸に進む。

は、不成立である。

このように、ただひたすら移動を継続するだけの動詞に上接して空間場を示す場合には、格助詞「に」は使えないのである。

格助詞「に」が空間場を、移動空間場ではなく、静止空間場と規定して下位の動詞―運動に示す機能を有するという、もう一つの証拠となる事実を挙げることが出来る。それは、出発の運動を表す動詞に、格助詞「に」をもって、その空間場を示すことが出来ないという事実である。

東京を発つ。

のように、格助詞「を」で空間場を示すことが出来る出発の動詞「発つ」も、格助詞「に」を使って、

東京に発つ。

ということは出来ない。もちろん、「東京に発つ。」という表現自体は成立する。ただし、その場合は、「発つ」という出発の運動が行われる空間場ではなく、「発つ」という出発の運動が行われた後に始まる、移動の運動が再び停止する空間場すなわち目的地となる。

大阪に出発する。

も、大阪を空間場として「出発する」という運動が行われるという

表現としては不成立である。

駅に発する。

家に飛び出す。

大阪国際空港に飛び立つ。

学校に巣立つ。

土俵に踏みだす。

「発する」「飛び出す」「飛び立つ」「巣立つ」「踏みだす」など出発の運動を表す動詞の空間場を示す格助詞として「に」を使った文は、いずれも不成立である。

なぜ、出発の運動には格助詞「に」による空間場の提示が出来ないのであろうか。移動の運動は、出発し、継続し、そして、到着するという三つの展開がある。厳密にいうならば、出発と到着は、移動の運動の過程であって、移動の運動に包括されるべきものである。

出発という運動は、それ以前に静止した状態がなければ、出発ということは成り立たない。静止している事物が移動を始めてこそ、出発となるのである。移動しているものが、さらに移動を継続したとしても、出発とはならない。たとい、速度を増した場合でも、やはり出発とはならない。静止していた事物が移動を開始するのが、出発である。また、先の到着の運動と同様に、出発の運動自体も移動と静止の二つの要素を内包している。出発の運動が静止を失ったとき、それは、出発の運動ではなく、単なる継続する移動の運動に変質する。移動の運動がなければ、出発しないことはいうまでもない。

い。

このように、出発の運動も移動と静止の二つの運動を持っているが、それはあくまで、運動の客観的性格であって、人間の意識に映る映像と一致するものではない。人間の意識からするならば、出発という運動は、前段階の静止よりも、動き出すという移動の運動の方に強い印象と明確な映像を持っている。

したがって、出発の場合は、移動空間場となり、格助詞「を」が使われる。先に、格助詞「に」で不成立であった出発の運動を含む文も、格助詞「を」に置換すれば、成立する文となる。

通過の運動において、空間場は、どのように認識され、どのように表現されるであろうか。

運動の原理からするならば、通過という移動の運動は、通過する空間場を通っていき、つまり、継続する移動で空間場を通り過ぎなければならぬ。停止してしまったのでは通過するということはないし、通過はすでに移動の運動を開始してからその空間場にさしかかるのであるから出発ということは起こり得ない。したがって、その空間場は移動空間場でなければならない。果たして、日本語の表現もそうになっているだろうか。

四四三便が高松上空を通過する。

東海道本線は、名古屋を経て東京に到る。

運動場を通過して校舎へ行く。

電流は太い銅線を伝わる。

裏門を通り抜けて外に出る。

通過を表す「通過する」「経る」「通る」「伝わる」「通り抜ける」といった動詞では、移動空間場を規定し示す格助詞「を」が使われる。静止空間場を示すの格助詞「に」を使つては成立しない。

このことから、理論的に予想した通り、通過する空間場は、移動空間場として認識され、表現されていることが分かる。

以上、移動の運動と空間場の関係を考察してみた。その結果、移動の運動を表さない、静止した状態を表す動詞は、格助詞「に」による静止空間場をとることが分かったが、移動と直接関係のない他の動詞はどうであろうか。

洗面所で顔を洗う。

子供部屋で遊ぶ。

どちらも格助詞「に」は使えない。格助詞「で」の方が圧倒的に優勢になっている。格助詞「で」は、「にて」から成立したもので、形態が変わった今日でも意味としては同じものを内包している。したがって、意味において分析すると、格助詞「で」は、「に」ある十て」となる。これを「子供部屋で遊ぶ。」にあてはめると、「子供部屋に」ある十て十遊ぶ。」となる。すなわち、「子供部屋に」と静止空間場を示し、その空間場における主体（例えば、息子）の存在を表現した上で、その主体の行動、行為など（運動）を表現するという、二段階の表現方法をとっているのである。では、どのような動詞が、格助詞「に」によって空間場を示すことが出来ず、格助詞「で」によるのかはつきりしない。

「椅子にすわる。」「現場に現れる。」「空に響く。」「脱衣所に着物

を脱ぐ。」のように格助詞「へ」に近い意味で格助詞「に」が使える動詞には、格助詞「に」による空間場提示が出来る。この場合、格助詞「に」が示す空間場は、下位の運動が行われている場というイメージは希薄で、移動の運動でいえば、「淀川は大阪湾に流れる。」（大阪湾は、「流れる」という継続の運動が行われている空間場ではなく、継続の運動がやがて到着の運動となる空間場である）の「大阪湾」と同じような表現になる。

三鷹に家を建てる。

三鷹で家を建てる。

後の文には、「三鷹に」自分の家を新築するという意味は認められず、大工を職業とする人々がたまたま「三鷹で」仕事をしているという意味にとれるということが指摘されている。^{注二}前の文は、「三鷹に」という静止空間場で制御されていて、「建てる」という建築の行為そのものの表現が抑えられてしまつて、建築の行為の存在の表現の方が前面に出てくる。そのため、「建てる」という大工の行動の映像が希薄になり、「三鷹に」は、建設された家の存在する場所の表現と近似なものになるのである。一方、後の文の「三鷹で」の方は、「三鷹に」ある十て」と、「三鷹に」の静止空間場は、格助詞「で」に含まれる存在の意味にかかつて、一応、その制御の役割を終えてしまうから、以下の「家を建てる」は、静止空間場から解放されている。したがって、「家を建てる」という行為や事柄の存在の表現（それは、「で」に含まれる「ある」のところなんです）が引つ込み、建築の行為そのものがいきいきと前面に出てく

る。そして、大工の行動が活性化されてイメージされてくるのである。

「三鷹に家を建てる。」という表現は、もう一つの理解が可能である。それは、先に述べた「脱衣所に着物を脱ぐ。」の「脱衣所に」と「脱ぐ」との関係のように理解することである。「脱衣所に」は、「脱ぐ」という行為を行う場所あるいは「脱ぐ」という行為が行われている場というよりは、脱いだ着物を置く場所というイメージが強い。「脱衣所」という空間場は、「着物を脱ぐ」という行為が差し向かう所といった感じである。この「に」は、「へ」に近い。このように理解すると、「三鷹に家を建てる。」は、三鷹という空間場にあつて家を建てるというのではなく、「三鷹へ家を建てる。」といったニュアンスの表現になる。前の理解だと、「三鷹という所で自宅を建てている」となるが、後の格助詞「へ」に近い用法とすれば、「三鷹という所へ自宅を建てようとしている。」となる。格助詞「に」が示す空間場から解放された後者の用法では、大工の行動をイメージするまでにはいかないが、前者の「建てる」よりは活性化した意図的、積極的な行動のイメージが生まれる。

学校に運動会があるように、会社にも運動会がある。

というように、単に事柄の存在を表現するときには、格助詞「に」によって静止空間場を示すのが普通の表現である。ところが、ただ単に運動会があるというだけではなく、それが華やかに催される映像を喚起しようとすれば、

学校で運動会がある。

と、格助詞「で」で空間場を示さなければならない。

学校に運動会がある。

では、ただあるというだけで、催のダイナミックなイメージは喚起されない。「学校に」という静止空間場に制御されて、「ある」も活性化された運動の映像を喚起する表現機能を失っているのである。

このように見てくると、格助詞「に」が示す空間場は、移動主体が動き回ることを拒否するばかりではなく、ダイナミックな運動も避けているように思える。

三 移動と時間場

前節で、移動と空間場との関係を考察してきたが、この節では、移動と時間場との関係について考察してみたい。

時間場にも、空間場の移動空間場に相当する、その中を事物が時間的移動が出来る時間場（「移動時間場」と呼ぶ）と、静止空間場に相当する、静止の状態の事物の存在しか許さない時間場（「静止時間場」と呼ぶ）とがあるのだろうか。

時間の移動を表す動詞はごく限られて、そのほとんどが、空間場における移動を表す動詞でもある。

時が移る。

の「移る」は、

東京に移る。

のように、空間場における移動の運動を表す動詞として使える。

時が流れる。

の「流れる」も、

利根川が関東平野を流れる。

の「流れる」のように、空間場における移動を表す動詞として使われる。

時代を経る。

の「経る」も、

東京を経てアメリカへ帰る。

やはり、空間場の移動に使える。

一つの時代が去った。

の「去る」も、

大阪を去って、松山に行く。

と、空間場の移動にも使える。

わずかに、「経過する」「経つ」などの動詞が、もっぱら時間場の移動を表し、空間場の移動を表すのには使えない。しかし、「経つ」は、「経」と「発」で書き分けているが、もともとは、「東京を発つ」の「発つ」と同語であろう。時間が、自分のいる場に生じては飛び去っていくところから、時間の経過を表すことになったのである。その意味では、「経つ」もまた時間場の移動と空間場の移動の両方に使える動詞と認めることが出来る。その他に、「過ぎす」という動詞が時間場の移動にしか使えないように思える。しかし、「過ぎす」には、「酒を過ぎす。」などといった用法があつて、「移る」「歩く」などといった自動詞の移動を表す動詞とは性質を異にする。

以上のように、少なくとも和語系統の移動を表す動詞で、時間場における移動のみに使えると完全にいい切れる動詞はないといつてよい。このことから、われわれ日本人が、時間というものを考える場合、一旦空間化して認識しているのだということが分かる。

ところが、空間場の移動を表すのには使えるが、時間場の移動を表すのには使えないという動詞は実に多いのである。「走る」を使つて、

時が走る。

とも、一日を過ぎたという意味で、

私は、一日を走った。

ともいえない。時間場を一旦空間として認識するといつても、やはりそれはそれで容易なことではないのであろう。時間に対する人間の認識における苦勞のほどがうかがえる。

空間場における移動を表す動詞が時間場における移動にも使えると述べたが、両者には決定的な用法上の違いがある。それは、空間場においては、空間場の中を、移動主体が移動するという表現が可能だが、時間場の移動に使うときには、ほとんどの動詞がそうした表現が出来ず、時間自体が移動するという表現をとることになるのである。

時が移る。

は成立する表現だが、移動する移動主体は、時自体である。

山本は一日中を朝から晩までぼんやりして移る。

これは、不成立の文といわざるをえない。「過ぎる」も同じことで

ある。

時が過ぎる。

は、時間自体の移動である。

この事実から、少なくとも日本人にとって、時間場というもの、その内部を時間的に事物が移動していく場としてとらえることが困難であるという事実を導くことが出来る。

さて、「時が移る。」「時代が移る。」といった時間自体が移動する表現についてもう少し考えてみよう。時間自体が移動するとき、一体どのような場を、その時間が移動するものとして、我々は認識し、表現しているのだろうか。それがたとい、時間というような抽象的なものであるにせよ、移動という運動である以上、なんらかの移動の場をイメージしているはずである。分かりやすくいえば、「時が移る」で、時は、どこを移っていくのであろうかということである。

しかし、格助詞「に」を使っても、格助詞「を」を使っても、そうした時間場は表し得ないのである。

Aに(を)時が移る。

Aにあてはめられる場の表現が見出せないのである。もちろん、哲学的に、あるいは、イメージとしては、いろいろと想定できるが、言語表現としては導き出せない。それが、時間場なのか、空間場なのかさえ、言語表現としては確認の方法がない。しかし、先にも述べた通り、何らかの場の存在を我々は感じている。そこで、それを、無規定の場(「無規定場」と呼ぶ)としてとらえる。もちろん、無

規定場を示す助詞はない。

時間自体の移動は、移動時間場ではなく、無規定時間場で行われ、時間場を移動時間場と認識することは困難であると述べたが、移動時間場と認識することがまったくないのかといえ、そうではない。移動時間場で時間的移動を表す表現も僅かであるが存在する。

十年の歳月を経て橋が完成した。

十年の歳月という時間場を格助詞「を」で示していることから、それを移動時間場として認識していることがうかがわれる。ただし、十年の歳月という時間場を移動してきた移動の主体が、橋であるのか、橋の工事なのか、英語のitに当たるものであるかは、なお検討を要するところであろう。

このように、時間場を移動時間場と認識し、そうした時間場を経過、移動してきたと表現する用例は既に中古にも見えている。

年を経てよばひわたりけるを(『伊勢物語』第六段)

などがそれである。もっとも中古には、

年ごろを住みし所の名に負へば(『土左日記』)

といったような、移動の動詞ではない「住む」に格助詞「を」が時間場を示す用例が見られる。こうした用法は現代には見られなくなっている。しかし、「住みし」が、語意の次元ではなくとも、表現の次元で、「ずっと住み続けてきた」という移動の意味を表しているとするれば、移動空間場としての表現ととることができよう。現代語では、語意の次元で移動の意味を持たない動詞に対しては、格助詞「を」で時間場を示すことがないという厳しい制限が加えられる

ことになったと見るべきではなからうか。

ともあれ、現代語においても、「……を経る」という形で、移動時間場を示し、その中を、移動主体が移動していくという表現が存在することは事実である。したがって、時間を移動時間場として認識することが、日本人に皆無でないことは認めなければなるまい。

しかし、この「……を経る」の場合ですら、空間場のように、移動出来る明確な場を作っていない。その証拠となる事実がある。前節で述べたように、移動空間を空間場とする移動表現は、「HがAをpからqまで移動する」を基本的な表現の形とするわけだが、移動時間を時間場とする移動においては、「pからqまで」という表現が出来ないのである。たとえば、「十年の歳月を経て橋は完成した。」に「pからqまで」の表現「一九七一年から一九八一年まで」を付加して、

十年の歳月を一九七一年から一九八一年まで経て橋は完成した。とすると、不成立の文になってしまう。しかし、次のように、言い換えると、成立する。

一九七一年から一九八一年まで十年の歳月を経て橋は完成した。これは、単なる倒置のようだが、認識と表現の上では全く異なると見なければならぬ。はじめの表現では、まず、「十年の歳月を」と時間場を示し、次に、その時間場の内部に移動の区間を「一九七一年から一九八一年まで」と明示するという手順で表現されている。それに対して、後の表現は、はじめから「一九七一年から一九八一年まで」と明示された時間場を示し、移動の表現を行っている

のである。前者では、まず移動時間場をイメージし、その内部をさらにイメージし、その中に二点間の区切りをつけるという認識の過程が踏まれている。ということは、移動時間場の内部が、明確にイメージされていることを意味する。それに対して、後者は、既に限定された時間場を示しているにすぎないのであって、事物が移動するための時間場の内部を明確にイメージするということが行われてはいないのである。もし前者の表現が成立するならば、その時間場は、明確な内部構造を持つ移動時間場を示した表現ということになるが、現実にはそうした表現は成立しないのであるから、時間場を移動時間場として認識することが、空間場の場合に比してまだ未熟な状態にあるといわなければならない。

二時間にわたって演説をした。

「わたる」は、空間場の場合、「車が橋を渡る。」「冷風が樹間をわたる。」というように、格助詞「を」の移動空間場で、継続や通過の移動の運動を表している。しかし、時間場の場合は、格助詞「に」の静止時間場を受けている。これは、時間場で使われる「わたる」は、移動の運動の映像が喪失してしまっていて、時間の幅の存在を示すだけになっているからだと思われる。空間場のときは「渡る」、時間場のときは「互る」と書き分けられるのもそのためであろう。古典語では、

木の下にしるをひろひて世を渡るかな。(『平家物語』四)
のように、「わたる」は、時間場でも移動の運動の映像をもって使われていた。時間場も格助詞「を」による移動時間場である。

さらに、移動時間場として時間場が示される表現がある。

時代を遡って考える。

という文が成立するのである。「時代を」と時間場を格助詞「を」で規定し、示しているところからも、この「時代」という時間場は、移動時間場として規定され、示されていると判断される。では、遡って移動していく移動主体は何か。人間の思考の視点ということになる。時代という空間場の中を、視点を移動させながら、考えていくのである。

既に過ぎ去った時間を考えるとき、眼前に広がる空間としてそれをつかむという事実は、ベルグソンなどの哲学者によって指摘されているところである。

この時間場を遡及する表現においては、先の場合と違って、「HはAをpからqまで移動する」という移動の基本型を満足させる表現が可能なのである。

時代を一八世紀まで遡ると、現在の日本人とはだいぶ違う考えを持つ人がたくさんいたようだ。

「一八世紀まで」という「pからqまで」に相当する表現を加えることが出来る。これは、時間場を時間の流れの負方向に移動する。

「……を経る」の場合と明らかに違う事実である。時間の流れを正方向にとらえるときは移動時間場としてはとらえにくい、負方向すなわち逆方向にとらえるときは、空間場における移動空間場に匹敵する成熟した移動時間場内部の映像を持つことが出来るのだらう。

時間の移動の表現においても、時間場を、移動時間場ととらえることもないわけではないが、やはり特殊であったということになる。では、その外の、時間場における移動の運動ではどうなっているだろうか。

三時間、雨が降った。

この文には、移動の運動を表す動詞は使われてはいないが、表現の次元で、示された時間場をそのようにしてずっと過ごしてきたということから、時間場における移動の運動、しかも、時間自体が移動主体となっていない移動の運動の例とみなし得る。

この文の時間場「三時間」は、格助詞なしで示されている。それなら、格助詞の省略かといえそうではない。

三時間に雨が降った。

三時間を雨が降った。

と普通はいわない。

ところが、

三時間に五〇ミリの雨が降った。

なら、格助詞「に」を使って時間場を示せるのである。この文は、三時間という時間場において五〇ミリの降雨があったということを表している。時間場における移動の運動を表すものではない。時間場における事物の存在を表す表現に相当する。「三時間に五〇ミリの降雨があった。」と等しい。したがって、示された時間場は、静止時間場として規定されなければならない。事実、この文を、移動時間場を示す格助詞「を」を使って書き換えることは出来ない。

三時間を五〇ミリの雨が降った。
は普通、不成立である。

移動時間場として規定し示さなければならない「三時間、雨が降った。」では、格助詞「に」は使えないのである。だからといって、格助詞「を」を使って示すには、移動時間場としての認識が未成熟である。そうした状態において、格助詞「を」「に」を使わない表現が生じたと推定される。

ただし。

二か月、私は病院で暮らした。

は、

二か月を私は病院で暮らした。

のように、格助詞「を」を付けても成立する。「暮らす」は移動時間場を明確に認識する数少ない動詞の一つである。これに似た動詞に「過ごす」があるが、「過ごす」には「酒を過ごす」などという時間場以外の事物を格助詞「を」で受ける用法があり、「暮らす」とは異なる。だが、「暮らす」が時間的移動の運動を語意の次元で持つ動詞と認めるには躊躇される点がないとはいえないが。

ところで、一見時間的移動の運動を表すように見えるものがある。

二時に、私は走る。

確かに、「二時に」という時間場を示す表現があり、「走る」という移動の運動を表す動詞に文法的にはかかっている。しかし、この「走る」の移動の運動は、たとえば、

二時に、私はグラウンドで走る。

のように、空間場での移動の運動であって、移動自体としては、「二時」という時間場と直接かわってはいない。「二時」という時間場は、走るという空間場の行為が存在する場（私がグラウンドで走るといふ事象が存在する場といいかえてもよい）を表しているのである。したがって、「二時」は静止時間場として格助詞「に」によって示されている。

さて、移動の運動には、四つの過程があることは前節で述べた。四つの過程とは、出発、継続、到着、そして、通過である。時間場における移動ではどうなっているのだろうか、時間場における移動の運動を過程に分けて考察することにする。

まず、通過の場として、時間場はどのようにとらえられ、どのように表現されているか見てみよう。通過の場は、空間場の場合、移動空間場としてとらえられていたが、時間場の場合は果たしてどうであろう。

時間場を通過の場とする移動の動詞は多くはないが、「過ぎる」などが考えられる。

二時を過ぎても彼は来ない。

お昼を過ぎたら、帰ってよらしい。

季節は、春を過ぎて、はや夏になった。

これはいずれも格助詞「を」をもって時間場が示される。これらの文を、格助詞「に」に言い換えることはできない。

とすれば、時間場の場合も、空間場の場合同様、通過の場は、移動時間場（空間場では移動空間場）として認識され、表現されるこ

とになる。

次に、到着の場としての時間場について考えてみよう。

列車は、一二時三〇分に着く。

小包は、明日の午後に届きます。

宇宙探査衛星は、来年の春に金星の付近に到着する。

これらはいずれも成立する文であるが、時間場はことごとく助詞「に」によって示されている。そして、いずれも、格助詞「を」に言い換えることは出来ない。この事実からは、一応、到着の運動における時間場は、静止時間場をとるということがいえそうに思える。もしそうならば、空間場の場合と一致することになる。しかし、そう簡単に片付けられない問題がある。そのことは、次の出発で再び触れることにしたい。

さて、出発の運動だが、一体どういう時間場をとるであろうか。用例で見ることにしよう。

四五〇便是、一七時二五分に松山空港を出発する。

私は、昼ごろに東京を発つ。

来年の四月に学校を巣立つ。

早朝に家を出て現地に向かう。

いずれも格助詞「に」が使われ、格助詞「を」を使うと成立しなくなる。空間場の場合と違って、出発の運動でも、時間場の場合は、静止時間場が示されることになるのであろうか。これは運動の原理と人間の認識という点からやはり奇異に思われる。空間場のところでも述べたように、出発の運動は、移動を開始するというところに、

人間は強い意識を持つのであって、静止に強い意識を持つとは考えられないからである。事実、空間場における出発では、静止よりも移動が強く意識されていた。

以上の事実から、出発の運動における時間場と空間場との間には運動に対する働きが違うと推定される。「四五〇便是、一七時二五分に松山空港を出発する。」の文でいうと、「一七時二五分に」と「松山空港を」とは同じように「出発する」にかかっているけれども、出発の運動に対する両者の働きは違っており、場の内容も時間場と空間場という違いだけではないのである。もしそうなら、ともに格助詞「に」または格助詞「を」とってしかるべきである。

「一七時二五分に」が出発の運動の時間場でないとしたら、一体いかなる場を表し示しているのだろうか。考えられるのは、出発という運動が「行われる場」ではなく「行われている場」を示しているのが「一七時二五分に」であるということである。すなわち、一七時二五分という時間場は、運動が行われる場ではなく、運動が存在する場であるということである。

出発の運動を表す動詞に限らず、すべての動詞が、運動と共にその存在をも表現する。「鳥が飛ぶ」では、「飛ぶ」は飛行という運動を表しているとともに、そうした飛行という運動が「行われている」ということも表しているのである。それは継続動詞であるか、瞬間動詞であるかということとは関係がない。「ている」を下接できる動詞であるかどうかということも関係がない。「今日、私は結婚する。」でも、「結婚する」という運動（人間の運動だから「行為」

と同時にその運動の存在をも表しているのである。「ている」をつけて「結婚している」とすると、既婚になってしまうこととは関係がない。

出発の運動において示される時間場は、出発の運動を表す動詞の運動そのものにかかっているのではなくて、出発の運動の存在にかかっていると考えることができよう。先の例でいうならば、「一七時二五分に」は「出発する」という運動そのものの場を示しているのではなく、「出発する」という運動が存在する場、そういう行為が、現在か未来に行われている場を表し示しているのである。したがって、出発の運動の移動性とは関係なく、静止時間場として格助詞「に」が使われればよいことになる。

とすれば、到着の運動において格助詞「に」で示される時間場も、到着の運動が直接かわる場ではなく、到着の運動が存在する時間場だと考えるべきであろう。同じように格助詞「に」が使われるが、空間場のときのように、到着の運動が静止を強く意識するからだというのではないのである。

このことは、移動の運動を表していない動詞についてもいえる。

三時に顔を洗う。

昭和一年に生まれた。

秋に花が咲く。

などいずれも「洗う」「生まれる」「咲く」という行動・行為(運動)の直接の場として「三時に」「昭和一年に」「秋に」が示されているのではなく、それらの運動が存在する場として示めされているの

である。だから、空間場の場合と違って、どのような動詞に対しても、必ずしも、格助詞「で」を使って「九時で寝る」のように「に十ある十て」の二段階表現をとる必要はないのである。「で」を使うと別の意味が加わる。

次に、継続のことだが、本節の冒頭で述べた、「経る」「遡る」などが、通過ともとれるけれども、時間表現の場合は、継続ととる。いずれも、移動時間場を取り、格助詞「を」が使われている。

四 まとめ

本稿で、考察してきたことをまとめると、次のようになる。

(1) 移動の運動が行われる場には、空間場・時間場・無規定場の三種の場がある。

(2) 空間場と時間場には、それぞれ、移動空間場・静止空間場、移動時間場・静止時間場がある。

(3) 移動空間場と移動時間場を格助詞「を」が表して示し、静止空間場と静止時間場を格助詞「に」が表して示す。格助詞は、関係概念を規定するだけではなく、上接語の概念を規定する機能を持つ。

(4) 空間場における移動の運動のそれぞれの過程の場の種類と使われる格助詞「に」「を」は次の通りである。

出発……………移動空間場……………「を」
継続……………移動空間場……………「を」

到着……………静止空間場……………「に」

通過……………移動空間場……………「を」

静止……………静止空間場……………「に」

(5) 時間場における移動の運動のそれぞれの過程の場の種類と使われる格助詞「に」「を」は次の通りである。

出発……………表現ナシ

継続①……………無規定場……………0

継続②……………移動時間場……………「を」

継続③……………移動時間場……………「を」

到着……………表現ナシ

通過……………移動時間場……………「を」

静止……………静止時間場……………「に」

継続①……………時間自体が移動の主体

継続②……………時間の流れに対して正方向への移動。「……を経る」など。

ど。

継続③……………時間の流れに対して負方向への移動。移動主体は視点など。

(6) 時間場を「運動が行われる場」とする出発・到着の動詞・表現はなく、それに相当するものとして、格助詞「から」(出発)、助詞「まで」(に)「(到着)」が使われる。

本稿の現代語の例文は、すべて、愛媛大学法文学部国語国文学専攻学生一三名(四年生 男子一名、女子一二名)に示して、成立、

不成立を確認した。

注一 注二 神尾昭雄「に」と「で」——日本語における空間的位置の表現——とする(『言語』第九卷第九号)